

日経・FT感染症会議

アジア・アフリカ医療イノベーションコンソーシアム（AMIC）AMR部会 ワーキンググループ

一般市民が「薬剤耐性（AMR）の脅威」を理解する上で重要なメッセージを特定する調査

2022年8月

お問合せなどがございましたら
下記までご連絡ください。

AMRアライアンス・ジャパン

（事務局：特定非営利活動法人 日本医療政策機構）

〒100-0004

東京都千代田区大手町1-9-2大手町フィナンシャルシティグランキューブ3階
グローバルビジネスハブ東京

TEL: 03-4243-7156

FAX: 03-4243-7378

Info: info@hgpi.org

Website: <https://www.hgpi.org/>

NIKKEI FT
Communicable
Diseases
Conference

 AMR
Alliance
Japan

調査結果概要

本調査の概要

● 目標・目的

AMRの脅威、不適正な抗菌薬・抗生物質の使用によるリスクについての Awareness を向上させる啓発活動に役立てるため、日本国内の一般市民が「AMRの脅威」を日本語で理解する上で重要なメッセージを特定すること。

一般市民の様々な層に対して、どのような種類のメッセージが最も影響力を持つかを明らかにするとともに、どのようなコミュニケーション・チャンネルを使用するのが最適かを明らかにすること。

● 調査設計

本調査はWEBアンケートによる定量的な調査として実施する。

● 調査対象

調査委託会社の持つ調査パネルより1,000名とし、性年代人口構成比で無作為抽出する。

18歳以上であり、日本語で書かれた文章を読むことができ、理解できる者を対象とした。

● 調査期間

2021年12月2日～2021年12月6日

調査結果のポイント

1. メッセージの発信を通じて、元来関心が無い層の認識を向上させることができる

自分ごとと捉えられるメッセージを適切な対象に届け続けることが必要

2. 若年者はデータに反応し、高齢者は自身への影響に注目する

世代ごとの特徴を考慮したメッセージ発信が必要

3. 全世代を通して重要視されるメッセージは3点ある

①世界的な死者数 ②治療薬の枯渇 ③高齢者への影響

4. 医療情報を発信すべき媒体（情報源）は、医療従事者による説明が重要

医師だけでなく、薬剤師をはじめとするコメディカルの参画による医療者全体での情報発信が大切

環境・動物・食に関するAMR情報

1. 環境におけるAMRへの関心は年齢が上がるにつれて高まる

2. 動物・食についてのAMR情報が重要だと感じる人は環境におけるAMRへの関心が高い

薬剤耐性菌に関する情報発信に向けた提案

薬剤耐性菌に関する情報発信にむけた提案①

世代間の関心の違いを考慮したメッセージ活動の必要性

- 本調査の結果、情報発信によってAMRに対する関心のない層に対してもメッセージ活動が有効であることが示唆され、これまでのメッセージ活動に加えて、今後より一層のメッセージ活動によってより多くの市民の理解を得ていくことが必要ではないか。
- 若年層は、AMRに対する問題意識を持ちにくいことからAMRへの関心が低いと考えられるため、SNSなど若者にリーチする媒体では客観的データを用いることが有効ではないか。
- 高齢者への情報提供においてはどのように自身の健康に影響を及ぼすのか、ということに特化した危機意識を喚起するための情報提供が必要ではないか。

薬剤耐性菌に関する情報発信にむけた提案②

医療者への信頼とAMR教育の必要性

- チャンネル調査（参考にしている情報源）においては医療従事者からの情報への信頼性が高いことが明らかになったことから、医師だけでなく薬剤師をはじめとしたコメディカルが、AMRに関して積極的に情報提供をしていくことが必要ではないか。
- 医療従事者へのAMR教育を強化・実行することで医療従事者から患者・市民への情報提供という形で正しい情報を提供するシステムとすることが有効ではないか。

薬剤耐性菌に関する情報発信にむけた提案③

One Health

- 環境に関するAMR情報は年齢が上がるにつれて関心が高まっており、若年層の関心が高い環境問題とは様相が異なる。このことから環境に関するAMR問題は環境問題ではなく健康問題として捉えられていること、またこれまで経験した公害や薬害事件といった経験も影響している可能性もあるのではないだろうか。
- 動物・食に関するAMR情報は、環境に関するAMR情報とセットで発信することでワンヘルスに関して全ての関心を向上することができるのではないか。
- 動物・環境・食に関するAMR情報はエビデンスが不足しているため、関心を高めるだけでなく、ヒトの健康への影響も未解明の部分が多いことも同時に伝え、適切なリスクコミュニケーションを行うことが大切ではないか。

調査結果詳細

デモグラフィックデータ①

| 項目 | N | N = 1,000 |
|--------------------|-------|---------------------|
| 年齢 | 1,000 | |
| 18歳 - 24歳 | | 79 / 1,000 (7.9%) |
| 25歳 - 34歳 | | 129 / 1,000 (12.9%) |
| 35歳 - 44歳 | | 169 / 1,000 (16.9%) |
| 45歳 - 54歳 | | 156 / 1,000 (15.6%) |
| 55歳 - 64歳 | | 149 / 1,000 (14.9%) |
| 65歳以上 | | 318 / 1,000 (31.8%) |
| 性別 | 1,000 | |
| 女性 | | 506 / 1,000 (50.6%) |
| 男性 | | 477 / 1,000 (47.7%) |
| 答えたくない | | 13 / 1,000 (1.3%) |
| その他 | | 4 / 1,000 (0.4%) |
| 最終学歴 | 1,000 | |
| 小学校卒業 | | 3 / 1,000 (0.3%) |
| 中学校卒業 | | 25 / 1,000 (2.5%) |
| 高等学校卒業 | | 354 / 1,000 (35.4%) |
| 高等学校卒業以上 | | 618 / 1,000 (61.8%) |
| 職業 | 1,000 | |
| 医療従事者 | | 60 / 1,000 (6.0%) |
| 医療従事者以外 | | 940 / 1,000 (94.0%) |
| 家族の医療従事者の有無 | 1,000 | |
| いない | | 909 / 1,000 (90.9%) |
| いる | | 91 / 1,000 (9.1%) |

デモグラフィックデータ②

| 項目 | N | N = 1,000 |
|-------------------|-------|---------------------|
| 居住地 | 1,000 | |
| 政令指定都市 | | 398 / 1,000 (39.8%) |
| 政令指定都市以外 | | 602 / 1,000 (60.2%) |
| 健康状態 | 1,000 | |
| 健康 | | 637 / 1,000 (63.7%) |
| 現在治療中の疾患あり | | 291 / 1,000 (29.1%) |
| 過去に治療経験あり、手術歴含む | | 61 / 1,000 (6.1%) |
| 過去に治療が難しい感染症の経験あり | | 11 / 1,000 (1.1%) |
| 同居家族の有無 | 1,000 | |
| なし | | 208 / 1,000 (20.8%) |
| あり | | 792 / 1,000 (79.2%) |
| 所得 | 1,000 | |
| 250万円以下 | | 542 / 1,000 (54.2%) |
| 251万-550万円 | | 303 / 1,000 (30.3%) |
| 551万円-850万円 | | 101 / 1,000 (10.1%) |
| 851万円以上 | | 54 / 1,000 (5.4%) |

(資料) 今回検討したメッセージ一覧

- 1 今後対策をしなければ、薬剤耐性菌感染症による全世界の死亡者数は、2050年には、がんより多い年間1,000万人に上る可能性がある
- 2 2050年の薬剤耐性菌感染症によるアジア太平洋地域の死亡者数は450万人との推測がある
- 3 日本では、薬剤耐性菌が原因で年間約 8,000人が死亡していると推定されている
- 4 日本では、薬剤耐性菌感染症と新型コロナウイルス感染症による死亡者数は同程度と考えられる
- 5 免疫力が低下している人や、高齢者が薬剤耐性菌感染症にかかると、死に至る可能性が高まる
- 6 海外の薬剤耐性菌がヒトの体内に残るなどして、日本国内に持ち込まれる可能性がある
- 7 薬剤耐性菌感染症を治療できる抗菌薬・抗生物質の開発は減少しており、将来的に治療薬がなくなることが心配されている
- 8 薬剤耐性菌感染症の治療に必要な抗菌薬・抗生物質を入手できない事態が発生することがある
- 9 薬剤耐性菌はヒトからヒトへと伝わる。そのため、手洗いやワクチンなどにより薬剤耐性菌が伝わることを防ぐことが大切である
 薬剤耐性菌はペットにも存在し、ペットと飼い主の間で薬剤耐性菌が伝わる可能性がある。そのため、特に室内で飼育する場合には、過剰な接触は避けること・手洗い・適切な汚物処理などにより薬剤耐性菌が伝わることを防ぐことが大切である
- 10 薬剤耐性菌は家畜にも存在し食品を介してヒトに伝わる可能性があるため、食材を十分に加熱するなどの一般的な食中毒対策が大切である
- 11 海外で広がっている薬剤耐性菌が輸入食材に付着している可能性がある
- 12 ヒトの健康を薬剤耐性菌から守るためには、環境にも配慮する対策が必要である
- 13 ヒト・動物に使用した抗菌薬・抗生物質やヒト・動物に存在する薬剤耐性菌は糞便等として体外に排出され、下水などの環境中に放出される
- 14 下水から治療の難しい薬剤耐性菌が見つかることがある

各世代が最も重要だと思うメッセージ

若年層（18～24歳）はデータを重要視

No. メッセージ内容

- 3 日本では、薬剤耐性菌が原因で年間約**8,000人**が死亡していると推定されている
- 2 2050年の薬剤耐性菌感染症によるアジア太平洋地域の死亡者数は**450万人**との推測がある
- 1 今後対策をしなければ、薬剤耐性菌感染症による全世界の死亡者数は、2050年には、がんより多い**年間1,000万人**に上る可能性がある
- 7 薬剤耐性菌感染症を治療できる抗菌薬・抗生物質の開発は減少しており、将来的に治療薬がなくなることが心配されている
- 10 薬剤耐性菌はペットにも存在し、ペットと飼い主の間で薬剤耐性菌が伝わる可能性がある。そのため、特に室内で飼育する場合には、過剰な接触は避けること・手洗い・適切な汚物処理などにより薬剤耐性菌が伝わることを防ぐことが大切である
- 4 日本では、薬剤耐性菌感染症と新型コロナウイルス感染症による死亡者数は同程度と考えられる
- 11 薬剤耐性菌は家畜にも存在し食品を介してヒトに伝わる可能性があるため、食材を十分に加熱するなどの一般的な食中毒対策が大切である
- 6 海外の薬剤耐性菌がヒトの体内に残るなどして、日本国内に持ち込まれる可能性がある
- 15 下水から治療の難しい薬剤耐性菌が見つかることがある
- 12 海外で広がっている薬剤耐性菌が輸入食材に付着している可能性がある
- 9 薬剤耐性菌はヒトからヒトへと伝わる。そのため、手洗いやワクチンなどにより薬剤耐性菌が伝わることを防ぐことが大切である
- 5 免疫力が低下している人や、高齢者が薬剤耐性菌感染症にかかると、死に至る可能性が高まる
- 13 ヒトの健康を薬剤耐性菌から守るためには、環境にも配慮する対策が必要である
- 8 薬剤耐性菌感染症の治療に必要な抗菌薬・抗生物質を入手できない事態が発生することがある
- 14 ヒト・動物に使用した抗菌薬・抗生物質やヒト・動物に存在する薬剤耐性菌は糞便等として体外に排出され、下水などの環境中に放出される

高齢者（65歳以上）は自身への影響を懸念

No. メッセージ内容

5 免疫力が低下している人や、高齢者が薬剤耐性菌感染症にかかると、死に至る可能性が高まる

- 1 今後対策をしなければ、薬剤耐性菌感染症による全世界の死亡者数は、2050年には、がんより多い年間1,000万人に上る可能性がある
- 7 薬剤耐性菌感染症を治療できる抗菌薬・抗生物質の開発は減少しており、将来的に治療薬がなくなることが心配されている
- 8 薬剤耐性菌感染症の治療に必要な抗菌薬・抗生物質を入手できない事態が発生することがある
- 10 薬剤耐性菌はペットにも存在し、ペットと飼い主の間で薬剤耐性菌が伝わる可能性がある。そのため、特に室内で飼育する場合には、過剰な接触は避けること・手洗い・適切な汚物処理などにより薬剤耐性菌が伝わることを防ぐことが大切である
- 14 ヒト・動物に使用した抗菌薬・抗生物質やヒト・動物に存在する薬剤耐性菌は糞便等として体外に排出され、下水などの環境中に放出される
- 9 薬剤耐性菌はヒトからヒトへと伝わる。そのため、手洗いやワクチンなどにより薬剤耐性菌が伝わることを防ぐことが大切である
- 12 海外で広がっている薬剤耐性菌が輸入食材に付着している可能性がある
- 6 海外の薬剤耐性菌がヒトの体内に残るなどして、日本国内に持ち込まれる可能性がある
- 3 日本では、薬剤耐性菌が原因で年間約 8,000人が死亡していると推定されている
- 11 薬剤耐性菌は家畜にも存在し食品を介してヒトに伝わる可能性があるため、食材を十分に加熱するなどの一般的な食中毒対策が大切である
- 15 下水から治療の難しい薬剤耐性菌が見つかることがある
- 13 ヒトの健康を薬剤耐性菌から守るためには、環境にも配慮する対策が必要である
- 4 日本では、薬剤耐性菌感染症と新型コロナウイルス感染症による死亡者数は同程度と考えられる
- 2 2050年の薬剤耐性菌感染症によるアジア太平洋地域の死亡者数は450万人との推測がある

全世代を通して重要視されるメッセージ

No. メッセージ内容

- 1 今後対策をしなければ、薬剤耐性菌感染症による全世界の死亡者数は、2050年には、がんより多い年間1,000万人に上る可能性がある
- 7 薬剤耐性菌感染症を治療できる抗菌薬・抗生物質の開発は減少しており、将来的に治療薬がなくなることが心配されている
- 5 免疫力が低下している人や、高齢者が薬剤耐性菌感染症にかかると、死に至る可能性が高まる
- 8 薬剤耐性菌感染症の治療に必要な抗菌薬・抗生物質を入手できない事態が発生することがある
- 3 日本では、薬剤耐性菌が原因で年間約 8,000人が死亡していると推定されている
- 12 海外で広がっている薬剤耐性菌が輸入食材に付着している可能性がある
- 9 薬剤耐性菌はヒトからヒトへと伝わる。そのため、手洗いやワクチンなどにより薬剤耐性菌が伝わることを防ぐことが大切である
- 10 薬剤耐性菌はペットにも存在し、ペットと飼い主の間で薬剤耐性菌が伝わる可能性がある。そのため、特に室内で飼育する場合には、過剰な接触は避けること・手洗い・適切な汚物処理などにより薬剤耐性菌が伝わることを防ぐことが大切である
- 15 下水から治療の難しい薬剤耐性菌が見つかることがある
- 6 海外の薬剤耐性菌がヒトの体内に残るなどして、日本国内に持ち込まれる可能性がある
- 2 2050年の薬剤耐性菌感染症によるアジア太平洋地域の死亡者数は450万人との推測がある
- 4 日本では、薬剤耐性菌感染症と新型コロナウイルス感染症による死亡者数は同程度と考えられる
- 14 ヒト・動物に使用した抗菌薬・抗生物質やヒト・動物に存在する薬剤耐性菌は糞便等として体外に排出され、下水などの環境中に放出される
- 11 薬剤耐性菌は家畜にも存在し食品を介してヒトに伝わる可能性があるため、食材を十分に加熱するなどの一般的な食中毒対策が大切である
- 13 ヒトの健康を薬剤耐性菌から守るためには、環境にも配慮する対策が必要である

参考：25~34歳が重要だと思うメッセージ

| No. | メッセージ内容 |
|-----|--|
| 1 | 今後対策をしなければ、薬剤耐性菌感染症による全世界の死亡者数は、2050年には、がんより多い年間1,000万人に上る可能性がある |
| 7 | 薬剤耐性菌感染症を治療できる抗菌薬・抗生物質の開発は減少しており、将来的に治療薬がなくなることが心配されている |
| 3 | 日本では、薬剤耐性菌が原因で年間約 8,000人が死亡していると推定されている |
| 8 | 薬剤耐性菌感染症の治療に必要な抗菌薬・抗生物質を入手できない事態が発生することがある |
| 5 | 免疫力が低下している人や、高齢者が薬剤耐性菌感染症にかかると、死に至る可能性が高まる |
| 2 | 2050年の薬剤耐性菌感染症によるアジア太平洋地域の死亡者数は450万人との推測がある |
| 15 | 下水から治療の難しい薬剤耐性菌が見つかることがある |
| 12 | 海外で広がっている薬剤耐性菌が輸入食材に付着している可能性がある |
| 11 | 薬剤耐性菌は家畜にも存在し食品を介してヒトに伝わる可能性があるため、食材を十分に加熱するなどの一般的な食中毒対策が大切である |
| 6 | 海外の薬剤耐性菌がヒトの体内に残るなどして、日本国内に持ち込まれる可能性がある |
| 4 | 日本では、薬剤耐性菌感染症と新型コロナウイルス感染症による死亡者数は同程度と考えられる |
| 10 | 薬剤耐性菌はペットにも存在し、ペットと飼い主の間で薬剤耐性菌が伝わる可能性がある。そのため、特に室内で飼育する場合には、過剰な接触は避けること・手洗い・適切な汚物処理などにより薬剤耐性菌が伝わることを防ぐことが大切である |
| 9 | 薬剤耐性菌はヒトからヒトへと伝わる。そのため、手洗いやワクチンなどにより薬剤耐性菌が伝わることを防ぐことが大切である |
| 14 | ヒト・動物に使用した抗菌薬・抗生物質やヒト・動物に存在する薬剤耐性菌は糞便等として体外に排出され、下水などの環境中に放出される |
| 13 | ヒトの健康を薬剤耐性菌から守るためには、環境にも配慮する対策が必要である |

参考：35~44歳が重要だと思うメッセージ

| No. | メッセージ内容 |
|-----|--|
| 3 | 日本では、薬剤耐性菌が原因で年間約 8,000人が死亡していると推定されている |
| 7 | 薬剤耐性菌感染症を治療できる抗菌薬・抗生物質の開発は減少しており、将来的に治療薬がなくなることが心配されている |
| 1 | 今後対策をしなければ、薬剤耐性菌感染症による全世界の死亡者数は、2050年には、がんより多い年間1,000万人に上る可能性がある |
| 5 | 免疫力が低下している人や、高齢者が薬剤耐性菌感染症にかかると、死に至る可能性が高まる |
| 12 | 海外で広がっている薬剤耐性菌が輸入食材に付着している可能性がある |
| 2 | 2050年の薬剤耐性菌感染症によるアジア太平洋地域の死亡者数は450万人との推測がある |
| 9 | 薬剤耐性菌はヒトからヒトへと伝わる。そのため、手洗いやワクチンなどにより薬剤耐性菌が伝わることを防ぐことが大切である |
| 8 | 薬剤耐性菌感染症の治療に必要な抗菌薬・抗生物質を入手できない事態が発生することがある |
| 15 | 下水から治療の難しい薬剤耐性菌が見つかることがある |
| 10 | 薬剤耐性菌はペットにも存在し、ペットと飼い主の間で薬剤耐性菌が伝わる可能性がある。そのため、特に室内で飼育する場合には、過剰な接触は避けること・手洗い・適切な汚物処理などにより薬剤耐性菌が伝わることを防ぐことが大切である |
| 6 | 海外の薬剤耐性菌がヒトの体内に残るなどして、日本国内に持ち込まれる可能性がある |
| 4 | 日本では、薬剤耐性菌感染症と新型コロナウイルス感染症による死亡者数は同程度と考えられる |
| 11 | 薬剤耐性菌は家畜にも存在し食品を介してヒトに伝わる可能性があるため、食材を十分に加熱するなどの一般的な食中毒対策が大切である |
| 14 | ヒト・動物に使用した抗菌薬・抗生物質やヒト・動物に存在する薬剤耐性菌は糞便等として体外に排出され、下水などの環境中に放出される |
| 13 | ヒトの健康を薬剤耐性菌から守るためには、環境にも配慮する対策が必要である |

参考：45~54歳が重要だと思うメッセージ

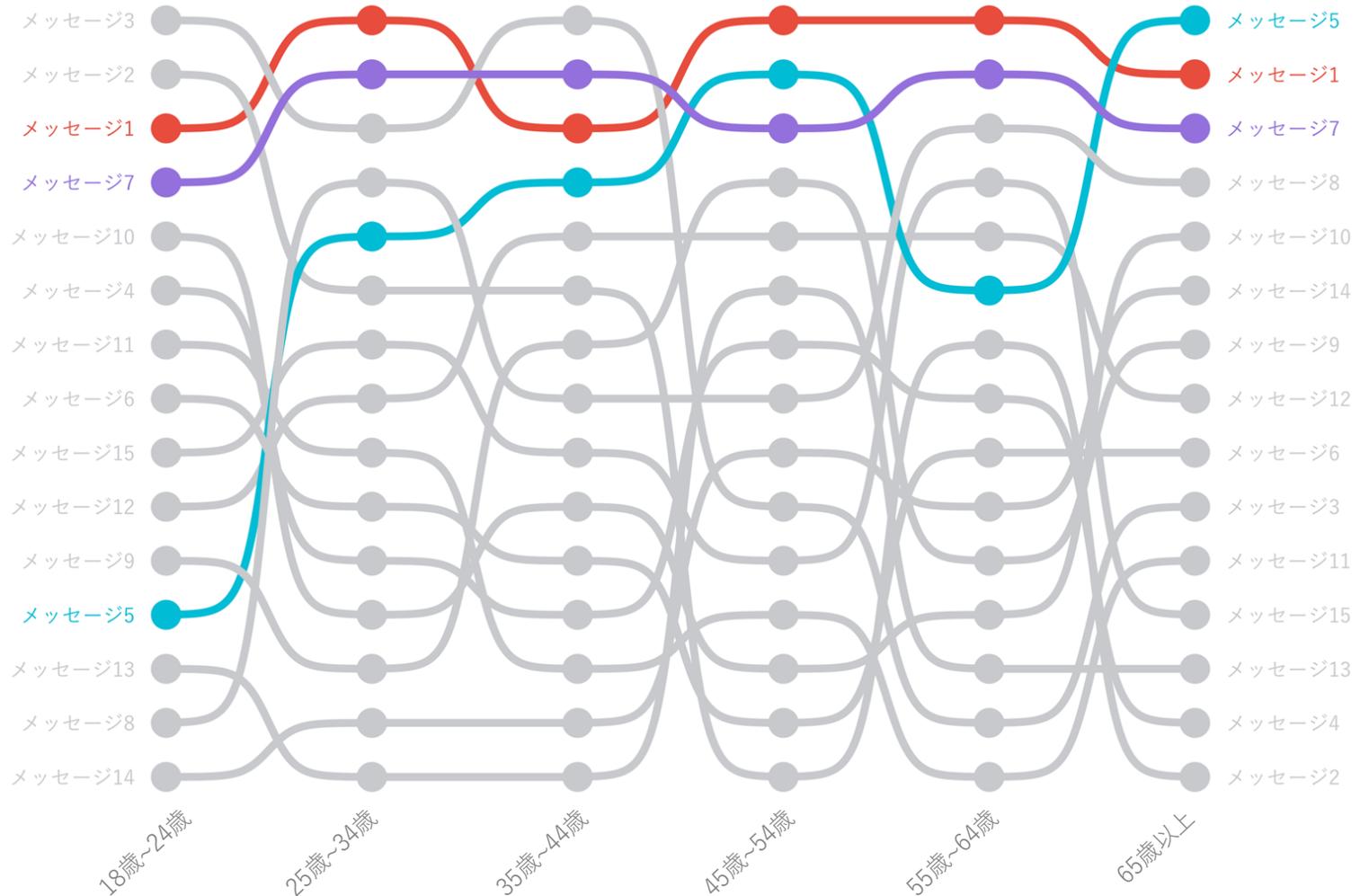
| No. | メッセージ内容 |
|-----|--|
| 1 | 今後対策をしなければ、薬剤耐性菌感染症による全世界の死亡者数は、2050年には、がんより多い年間1,000万人に上る可能性がある |
| 5 | 免疫力が低下している人や、高齢者が薬剤耐性菌感染症にかかると、死に至る可能性が高まる |
| 7 | 薬剤耐性菌感染症を治療できる抗菌薬・抗生物質の開発は減少しており、将来的に治療薬がなくなることが心配されている |
| 9 | 薬剤耐性菌はヒトからヒトへと伝わる。そのため、手洗いやワクチンなどにより薬剤耐性菌が伝わることを防ぐことが大切である |
| 12 | 海外で広がっている薬剤耐性菌が輸入食材に付着している可能性がある |
| 13 | ヒトの健康を薬剤耐性菌から守るためには、環境にも配慮する対策が必要である |
| 4 | 日本では、薬剤耐性菌感染症と新型コロナウイルス感染症による死亡者数は同程度と考えられる |
| 8 | 薬剤耐性菌感染症の治療に必要な抗菌薬・抗生物質を入手できない事態が発生することがある |
| 14 | ヒト・動物に使用した抗菌薬・抗生物質やヒト・動物に存在する薬剤耐性菌は糞便等として体外に排出され、下水などの環境中に放出される |
| 3 | 日本では、薬剤耐性菌が原因で年間約 8,000人が死亡していると推定されている |
| 15 | 下水から治療の難しい薬剤耐性菌が見つかることがある |
| 11 | 薬剤耐性菌は家畜にも存在し食品を介してヒトに伝わる可能性があるため、食材を十分に加熱するなどの一般的な食中毒対策が大切である |
| 10 | 薬剤耐性菌はペットにも存在し、ペットと飼い主の間で薬剤耐性菌が伝わる可能性がある。そのため、特に室内で飼育する場合には、過剰な接触は避けること・手洗い・適切な汚物処理などにより薬剤耐性菌が伝わることを防ぐことが大切である |
| 6 | 海外の薬剤耐性菌がヒトの体内に残るなどして、日本国内に持ち込まれる可能性がある |
| 2 | 2050年の薬剤耐性菌感染症によるアジア太平洋地域の死亡者数は450万人との推測がある |

参考：55~64歳が重要だと思うメッセージ

| No. | メッセージ内容 |
|-----|--|
| 1 | 今後対策をしなければ、薬剤耐性菌感染症による全世界の死亡者数は、2050年には、がんより多い年間1,000万人に上る可能性がある |
| 7 | 薬剤耐性菌感染症を治療できる抗菌薬・抗生物質の開発は減少しており、将来的に治療薬がなくなることが心配されている |
| 8 | 薬剤耐性菌感染症の治療に必要な抗菌薬・抗生物質を入手できない事態が発生することがある |
| 15 | 下水から治療の難しい薬剤耐性菌が見つかることがある |
| 12 | 海外で広がっている薬剤耐性菌が輸入食材に付着している可能性がある |
| 5 | 免疫力が低下している人や、高齢者が薬剤耐性菌感染症にかかると、死に至る可能性が高まる |
| 2 | 2050年の薬剤耐性菌感染症によるアジア太平洋地域の死亡者数は450万人との推測がある |
| 4 | 日本では、薬剤耐性菌感染症と新型コロナウイルス感染症による死亡者数は同程度と考えられる |
| 6 | 海外の薬剤耐性菌がヒトの体内に残るなどして、日本国内に持ち込まれる可能性がある |
| 14 | ヒト・動物に使用した抗菌薬・抗生物質やヒト・動物に存在する薬剤耐性菌は糞便等として体外に排出され、下水などの環境中に放出される |
| 9 | 薬剤耐性菌はヒトからヒトへと伝わる。そのため、手洗いやワクチンなどにより薬剤耐性菌が伝わることを防ぐことが大切である |
| 10 | 薬剤耐性菌はペットにも存在し、ペットと飼い主の間で薬剤耐性菌が伝わる可能性がある。そのため、特に室内で飼育する場合には、過剰な接触は避けること・手洗い・適切な汚物処理などにより薬剤耐性菌が伝わることを防ぐことが大切である |
| 13 | ヒトの健康を薬剤耐性菌から守るためには、環境にも配慮する対策が必要である |
| 3 | 日本では、薬剤耐性菌が原因で年間約 8,000人が死亡していると推定されている |
| 11 | 薬剤耐性菌は家畜にも存在し食品を介してヒトに伝わる可能性があるため、食材を十分に加熱するなどの一般的な食中毒対策が大切である |

参考：重要だと思うメッセージは年齢ごとに全く異なる

各世代が最も印象に残ったメッセージのランキングの変遷（上位3つハイライト）



抗菌薬の知識に関して

抗菌薬の知識に関する設問

Question :

1. 抗菌薬・抗生物質は咳や風邪に効く
2. 抗菌薬・抗生物質は細菌を殺すことができる
3. 抗菌薬・抗生物質はウイルスを殺すことができる
4. 体調が良くなれば定められた抗菌薬・抗生物質の服用期間の途中でも服用をやめても構わない
5. 処方された通りに服薬しなかった場合、抗菌薬・抗生物質が将来効きにくくなる
6. 余っている抗菌薬・抗生物質を保管しておき、調子がすぐれない時に医師、看護師、薬剤師の指示なしに服用しても良い
7. よくある抗菌薬・抗生物質の副作用の症状には、下痢がある

抗菌薬に関する知識のについての各設問ごとの正答率は40%を超えている

| 変数 | 全体 N = 983 | 性別 | | 年齢 | | | | | |
|-----------------|---------------|---------------|---------------|---------------------|----------------------|----------------------|----------------------|----------------------|------------------|
| | | 女性 N = 506 | 男性 N = 477 | 18歳 - 24歳 N = 73 | 25歳 - 34歳 N = 127 | 35歳 - 44歳 N = 164 | 45歳 - 54歳 N = 155 | 55歳 - 64歳 N = 149 | 65歳以上 N = 315 |
| 知識： 風邪 | 463 (47%) | 234 (46%) | 229 (48%) | 28 (38%) | 60 (47%) | 78 (48%) | 74 (48%) | 80 (54%) | 143 (45%) |
| 知識： 細菌 | 679 (69%) | 359 (71%) | 320 (67%) | 48 (66%) | 80 (63%) | 102 (62%) | 113 (73%) | 111 (74%) | 225 (71%) |
| 知識： ウイルス | 568 (58%) | 279 (55%) | 289 (61%) | 36 (49%) | 78 (61%) | 96 (59%) | 81 (52%) | 101 (68%) | 176 (56%) |
| 知識： 断薬 | 794 (81%) | 420 (83%) | 374 (78%) | 56 (77%) | 103 (81%) | 135 (82%) | 127 (82%) | 125 (84%) | 248 (79%) |
| 知識： コンプライアンス | 619 (63%) | 321 (63%) | 298 (62%) | 40 (55%) | 72 (57%) | 96 (59%) | 100 (65%) | 103 (69%) | 208 (66%) |
| 知識： 処方なし | 889 (90%) | 466 (92%) | 423 (89%) | 61 (84%) | 116 (91%) | 150 (91%) | 136 (88%) | 140 (94%) | 286 (91%) |
| 知識： 下痢 | 546 (56%) | 303 (60%) | 243 (51%) | 36 (49%) | 70 (55%) | 97 (59%) | 91 (59%) | 89 (60%) | 163 (52%) |

しかし、基本的な抗菌薬に関する事項を通して正解している人に限ると正答率は**20%以下**

Question :

1. 抗菌薬・抗生物質は咳や風邪に効く
2. 抗菌薬・抗生物質は細菌を殺すことができる
3. 抗菌薬・抗生物質はウイルスを殺すことができる
4. 体調が良くなれば定められた抗菌薬・抗生物質の服用期間の途中でも服用をやめても構わない
5. 処方された通りに服薬しなかった場合、抗菌薬・抗生物質が将来効きにくくなる
6. 余っている抗菌薬・抗生物質を保管しておき、調子がすぐれない時に医師、看護師、薬剤師の指示なしに服用しても良い
7. よくある抗菌薬・抗生物質の副作用の症状には、下痢がある

とくに若年者（18～24歳）は正答率が低い傾向

年齢

| | N | Overall N = 1,000 ¹ | 18歳 - 24歳 N = 79 ¹ | 25歳 - 34歳 N = 129 ¹ | 35歳 - 44歳 N = 169 ¹ | 45歳 - 54歳 N = 156 ¹ | 55歳 - 64歳 N = 149 ¹ | 65歳以上 N = 318 ¹ |
|-------------|-------|-----------------------------------|----------------------------------|-----------------------------------|-----------------------------------|-----------------------------------|-----------------------------------|-------------------------------|
| 知識：1～3 全て正解 | 1,000 | | | | | | | |
| 1. 正 | | 187人 / (18.7%) | 4人 / (5.1%) | 19人 / (14.7%) | 25人 / (14.8%) | 31人 / (19.9%) | 42人 / (28.2%) | 66人 / (20.8%) |
| 2. 誤 | | 813人 / (81.3%) | 75人 / (94.9%) | 110人 / (85.3%) | 144人 / (85.2%) | 125人 / (80.1%) | 107人 / (71.8%) | 252人 / (79.2%) |

¹ n人 / (%)

一方、知識がある人は問題意識も高い

Question :

あなたは前出のメッセージ（メッセージ1～15）を読んで、どの程度「問題である」と感じますか。

最もあてはまるものを次の1～5（問題であると全く感じない1-2-3-4-5問題であると非常に感じる）のうちから一つ選択してください。（15 – 75点）

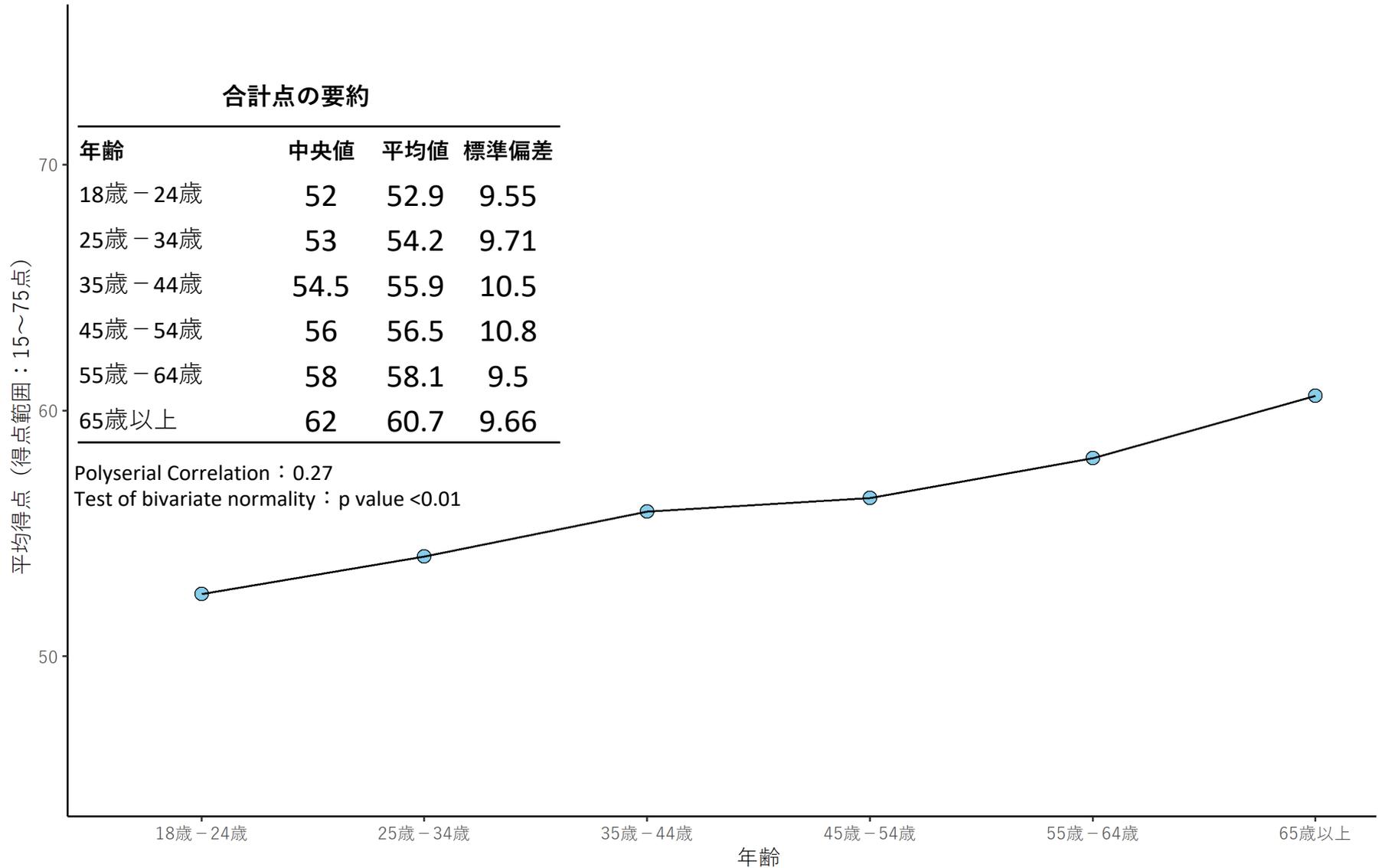
| | 3問すべて正解 | 3問中 1問以上不正解 | | | |
|----------------------|----------------------|----------------------|-------------------------|-----------------------|----------------------|
| | N = 187 ¹ | N = 813 ¹ | Difference ² | 95% CI ^{2,3} | p-value ² |
| 問題意識： 合計点 | 61.19 (9.20) | 56.41 (10.41) | 4.8 | 3.3, 6.3 | <0.001 |

¹ Mean (SD)

² Welch Two Sample t-test

³ CI = Confidence Interval

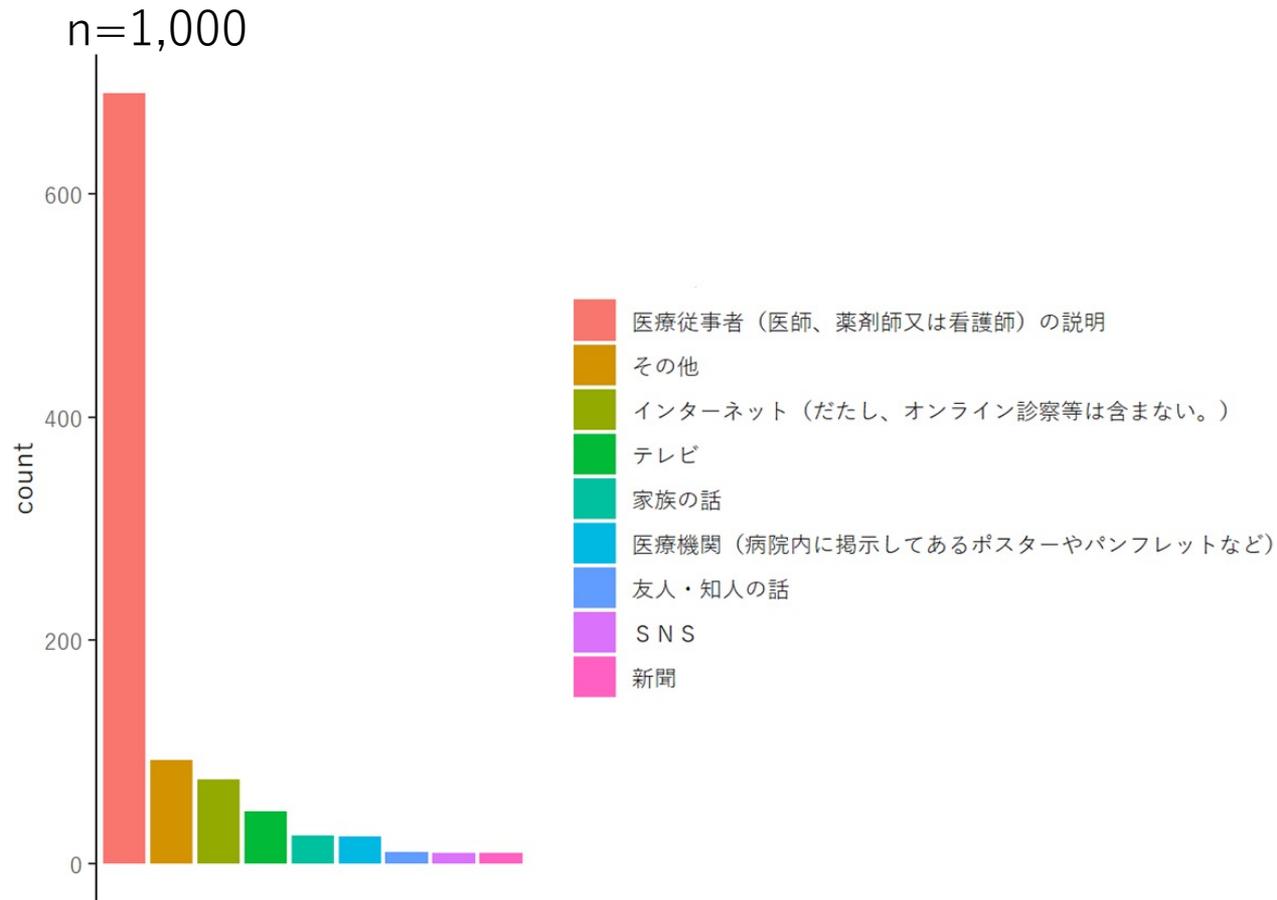
年齢が上がるごとに問題意識も徐々に上昇していく傾向



医療情報を発信すべき媒体（情報源）は、医療従事者による説明

Q3：あなたが医療情報を収集する際に一番信頼している媒体（情報源）は下記のうちどれですか。（※単一回答）

→SNSなどは補足的な役割であり「信頼される医療情報」としては認知されていない



メッセージの発信を通じて、元来関心が無い層の認識を向上させることができる

Question：薬剤耐性の問題に関心を持ちましたか。（各メッセージ回答後）

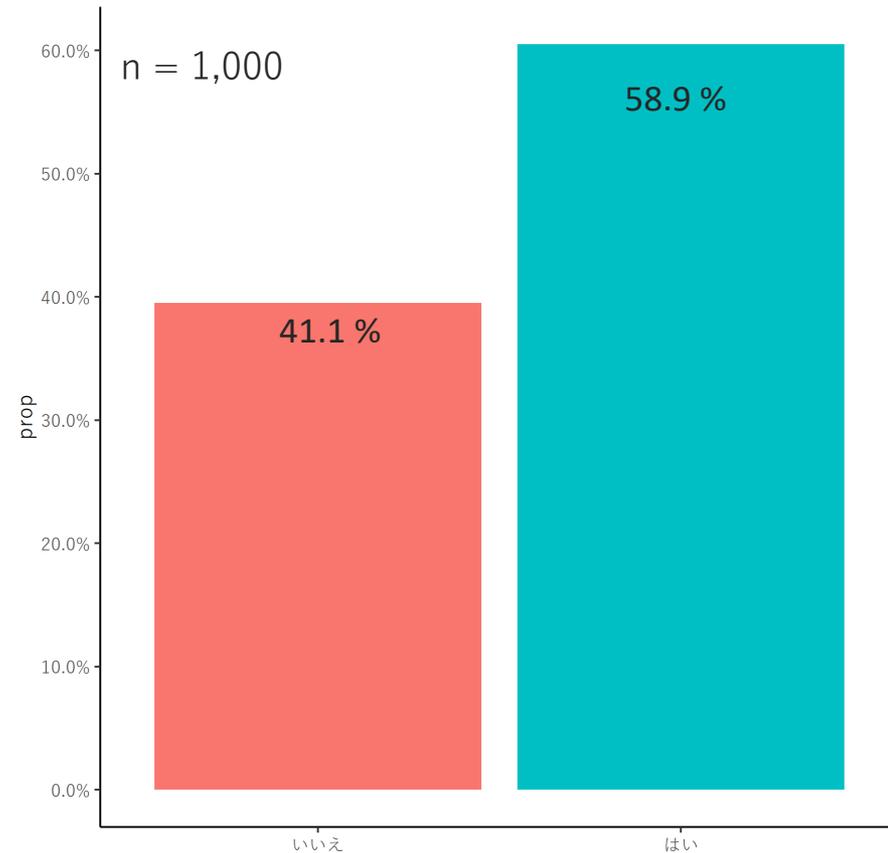
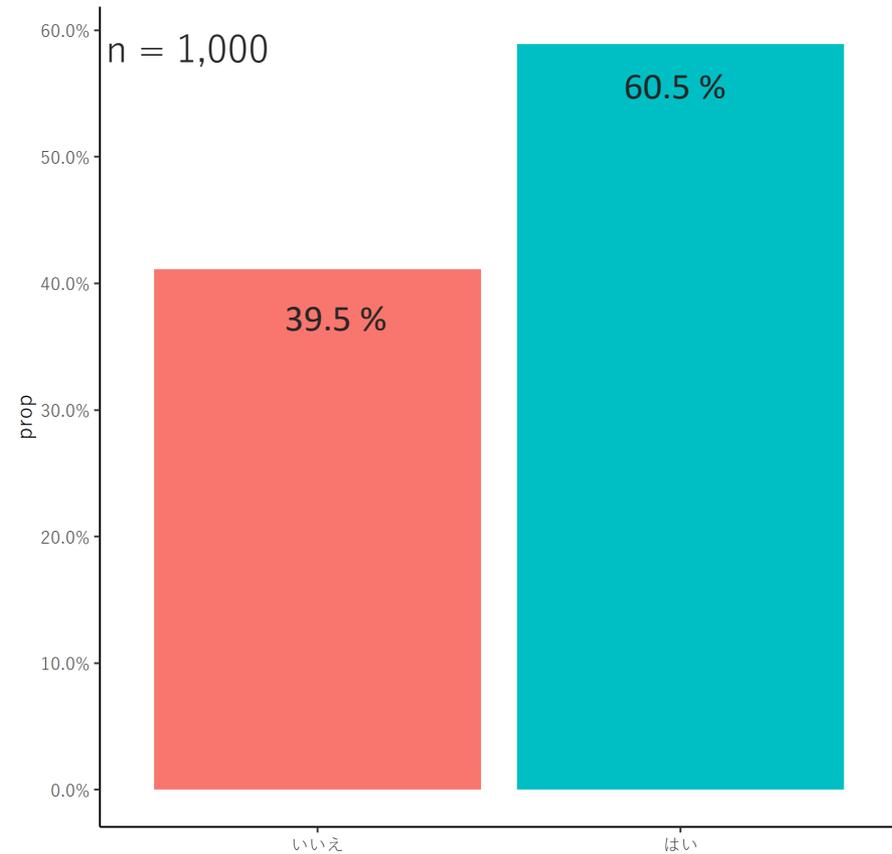
| | 回答前の関心の有無 | |
|--------------|---------------|---------------|
| | あり N = 381 | なし N = 602 |
| 回答後 | | |
| いいえ | 1(0.3%) | 129(21%) |
| 少し関心を持った | 69(18%) | 300(50%) |
| 関心を持った | 105(28%) | 119(20%) |
| 非常に関心を持った | 125(33%) | 54(9.0%) |
| もともと関心を持っていた | 81(21%) | 0(0%) |

One Health: 環境中のAMRに対する意識

約60% もの人々が環境中のAMR問題に対して関心がある

「環境中の薬剤耐性菌や残留抗菌薬・抗生物質に関心がありますか。」
(はい、いいえ)

「ヒトや動物に使用される抗菌薬・抗生物質」や「問題となる薬剤耐性菌」で環境が汚染されていると思いますか。
(はい、いいえ)



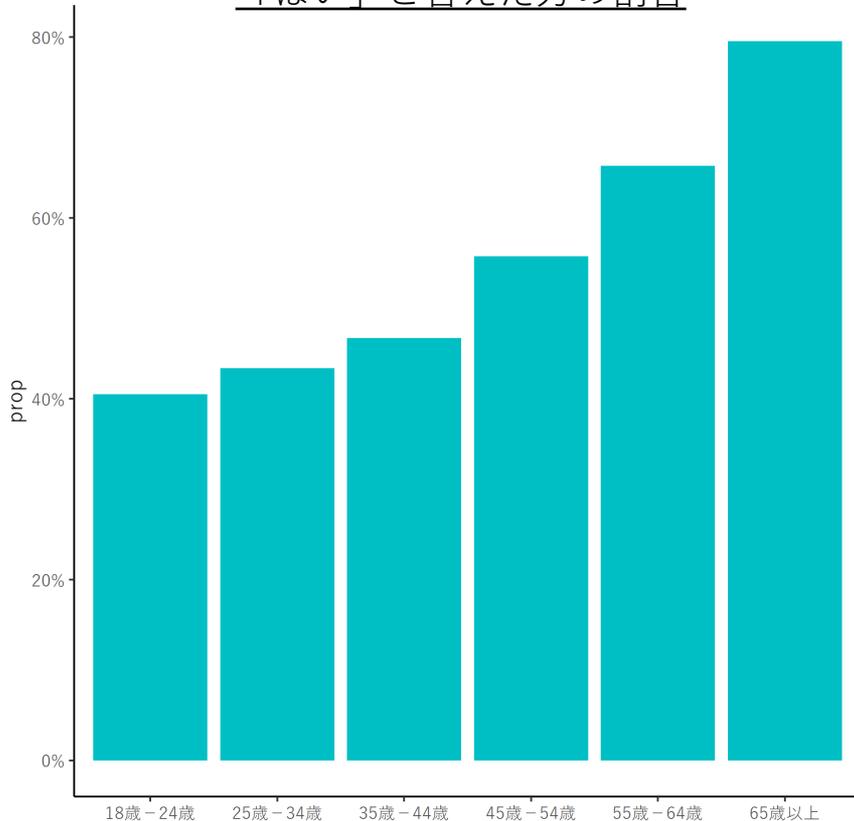
環境におけるAMRへの関心は年齢が上がるにつれて高まる

「環境中の薬剤耐性菌や残留抗菌薬・抗生物質に関心がありますか。」

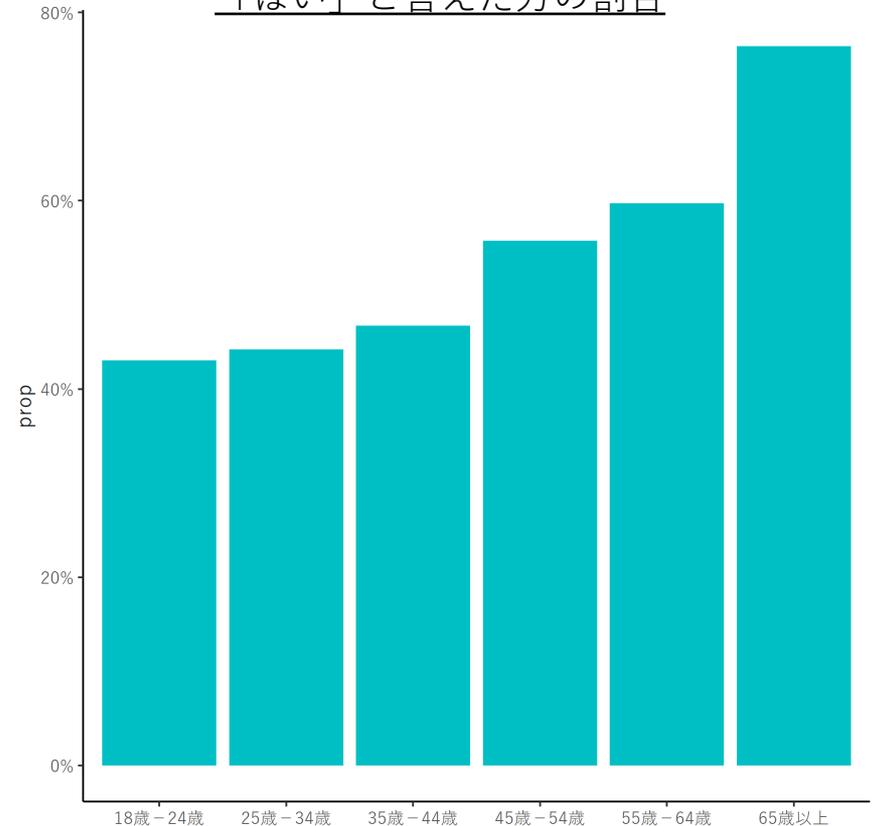
「ヒトや動物に使用される抗菌薬・抗生物質」や「問題となる薬剤耐性菌」で環境が汚染されていると思いますか。

(はい、いいえ)

「はい」と答えた方の割合

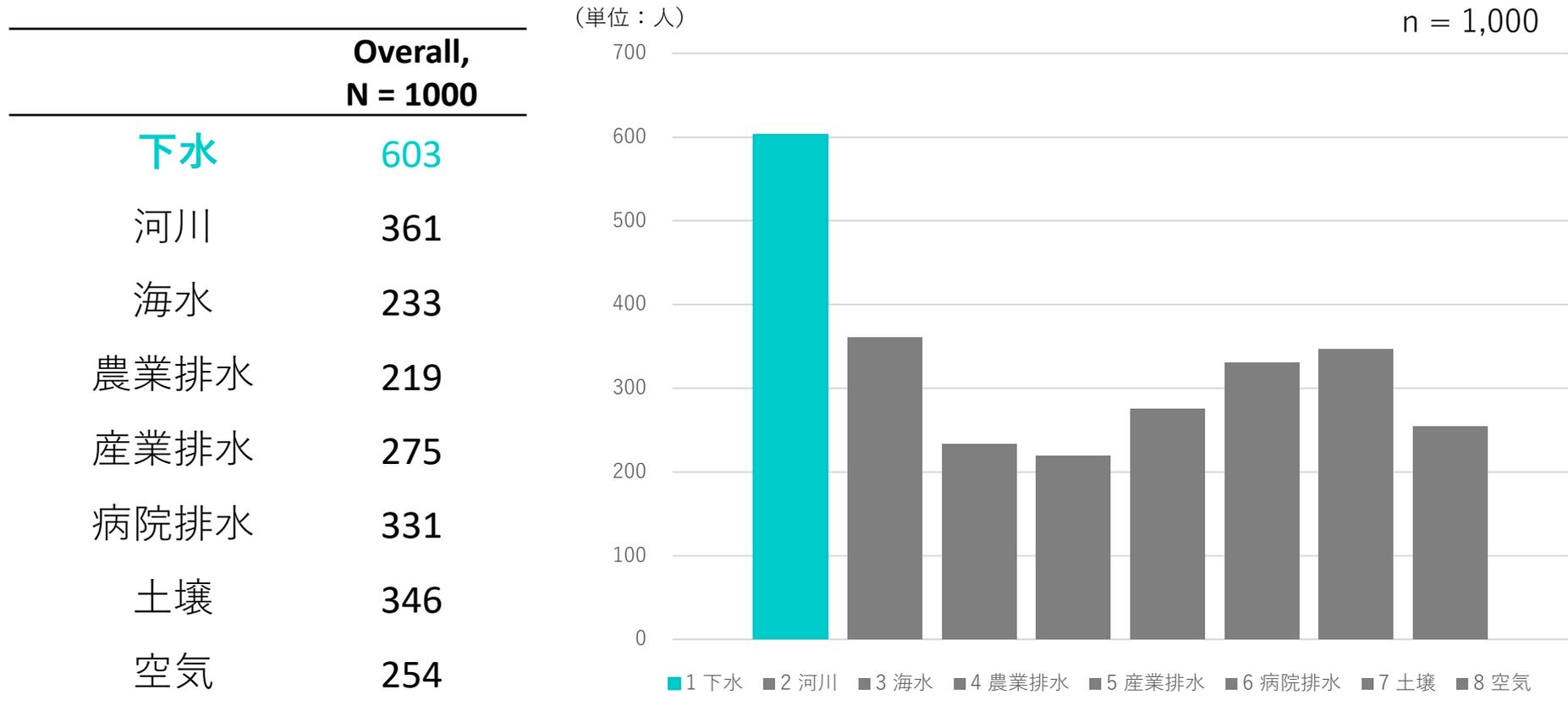


「はい」と答えた方の割合



環境AMRに関するメッセージ：身近な下水への関心が最も高い

どのような環境の薬剤耐性菌や
残留抗菌薬・抗生物質が問題だと思いますか。



One Health: 動物・食品AMRに対する意識

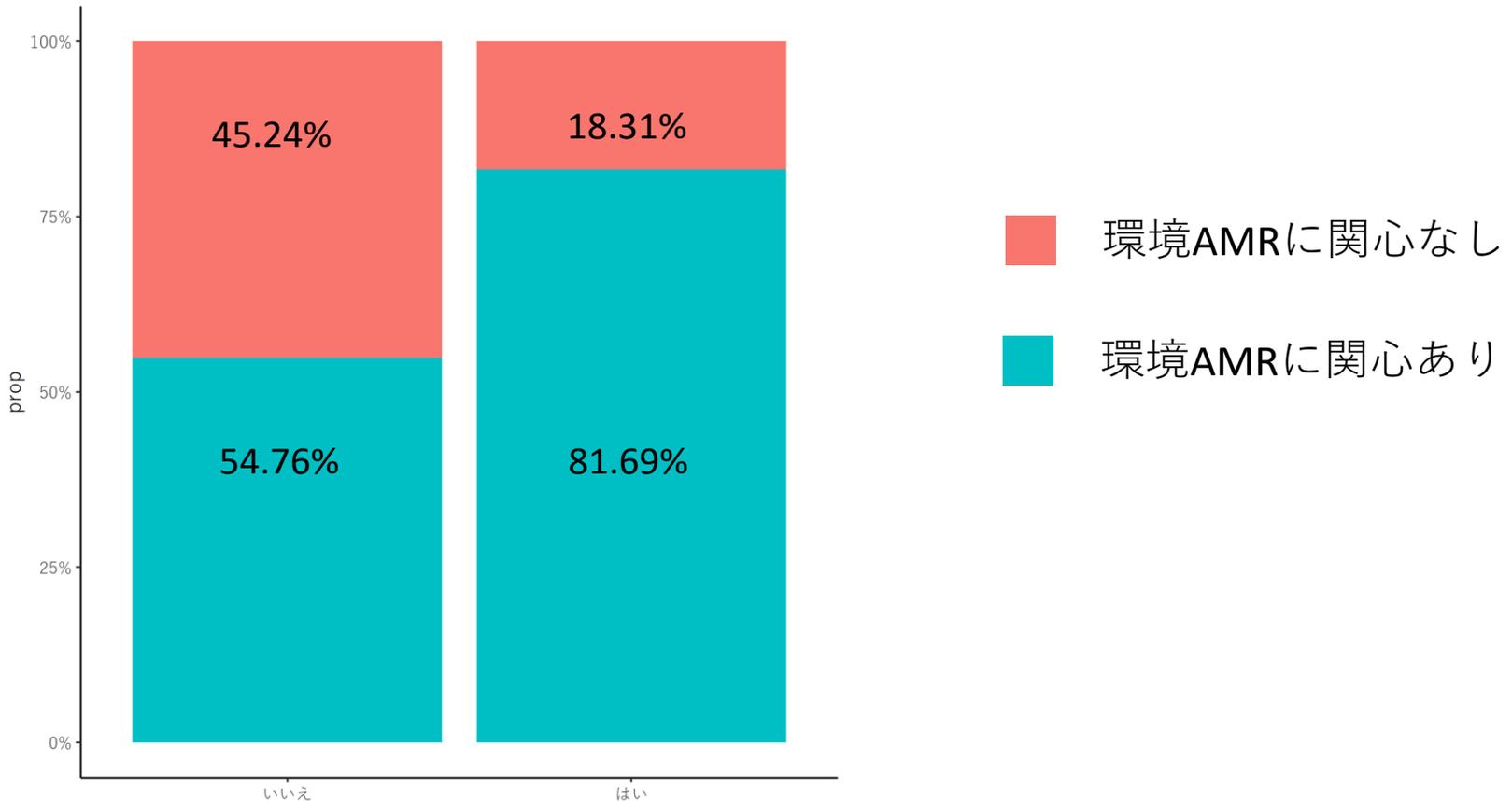
環境におけるAMRへの関心が高い層は
動物・食に関するメッセージについても重要であると感じる

環境におけるAMRへの関心がある層は動物・食に関するメッセージも印象に残ると回答

印象に残ったメッセージ：

薬剤耐性菌はペットにも存在し、ペットと飼い主の間で薬剤耐性菌が伝わる可能性がある。そのため、特に室内で飼育する場合には、過剰な接触は避けること・手洗い・適切な汚物処理などにより薬剤耐性菌が伝わることを防ぐことが大切である

(「いいえ／はい」により回答)

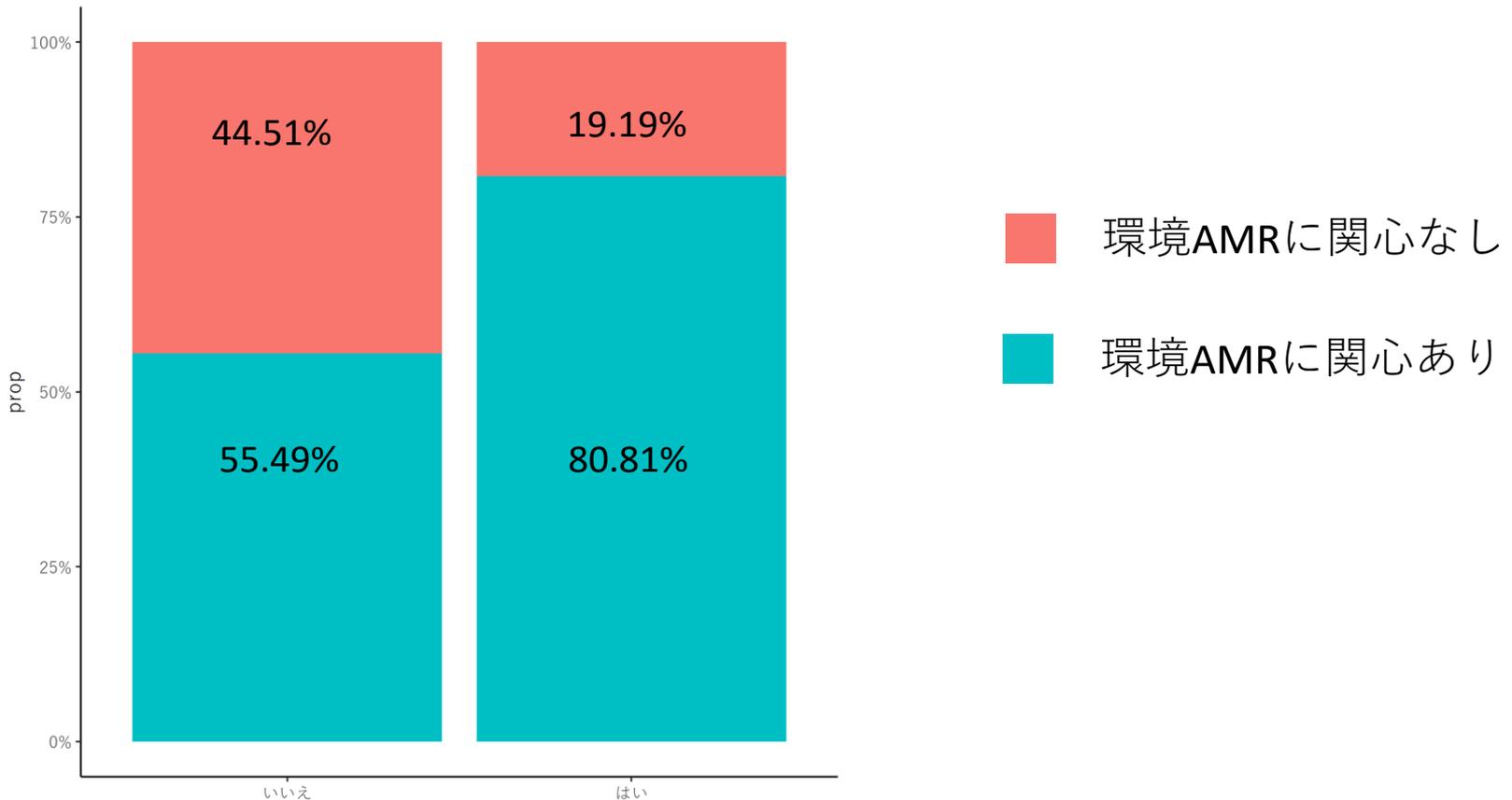


環境におけるAMRへの関心がある層は動物・食に関するメッセージも印象に残ると回答

印象に残ったメッセージ：

薬剤耐性菌は家畜にも存在し食品を介してヒトに伝わる可能性があるため、食材を十分に加熱するなどの一般的な食中毒対策が大切である

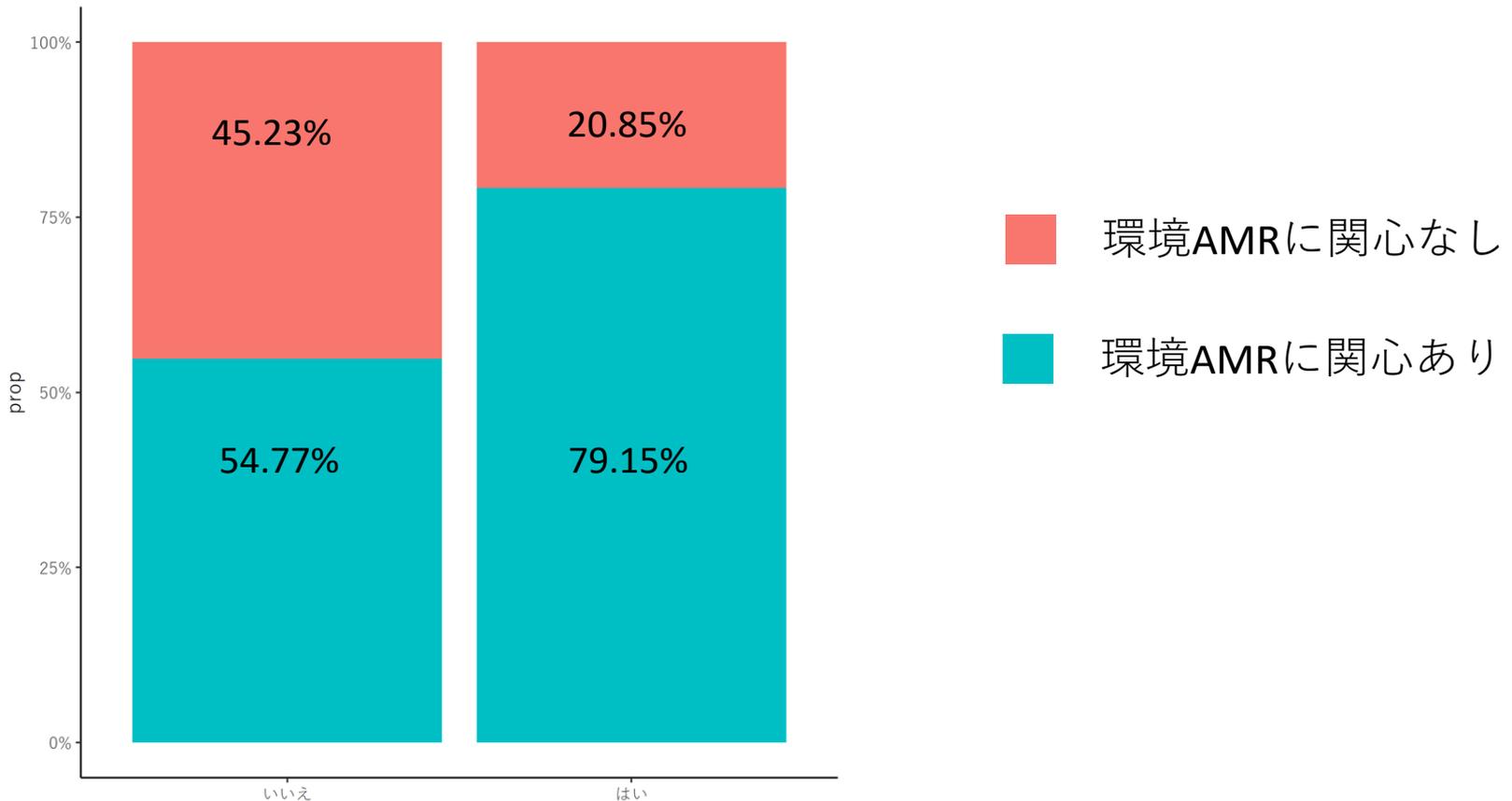
(「いいえ／はい」により回答)



環境におけるAMRへの関心がある層は動物・食に関するメッセージも印象に残ると回答

印象に残ったメッセージ：

海外で広がっている薬剤耐性菌が輸入食材に付着している可能性がある
(「いいえ/はい」により回答)



環境におけるAMRへの関心がある層は動物・食に関するメッセージも重要であると回答

「環境中の薬剤耐性菌や残留抗菌薬・抗生物質に関心がありますか。」
(はい、いいえ)

「ヒトや動物に使用される抗菌薬・抗生物質」や「問題となる薬剤耐性菌」で環境が汚染されていると思いますか。
(はい、いいえ)

| | N | はい, N = 605 ¹ | いいえ, N = 395 ¹ | p-value ² | はい, N = 589 ¹ | いいえ, N = 411 ¹ | p-value ² |
|-------------|-------|--------------------------|---------------------------|----------------------|--------------------------|---------------------------|----------------------|
| ペット | 1,000 | | | <0.001 | | | <0.001 |
| はい | | 174 (81.69%) | 39 (18.31%) | | 166 (77.93%) | 47 (22.07%) | |
| いいえ | | 431 (54.76%) | 356 (45.24%) | | 423 (53.75%) | 364 (46.25%) | |
| 食中毒 | 1,000 | | | <0.001 | | | <0.001 |
| はい | | 160 (80.81%) | 38 (19.19%) | | 146 (73.74%) | 52 (26.26%) | |
| いいえ | | 445 (55.49%) | 357 (44.51%) | | 443 (55.24%) | 359 (44.76%) | |
| 輸入食材 | 1,000 | | | <0.001 | | | <0.001 |
| はい | | 186 (79.15%) | 49 (20.85%) | | 175 (74.47%) | 60 (25.53%) | |
| いいえ | | 419 (54.77%) | 346 (45.23%) | | 414 (54.12%) | 351 (45.88%) | |

¹n (%)

²Pearson's Chi-squared test

NIKKEI FT
Communicable
Diseases
Conference



日経・FT 感染症会議 アジア・アフリカ医療イノベーションコンソーシアム (AMIC) AMR 部会
事務局 AMR アライアンス・ジャパン (特定非営利活動法人 日本医療政策機構)
Tel: 03-4243-7156 Fax: 03-4243-7378 E-mail: info@hgpi.org